

(参 考) 参加するにあたっての留意事項

- 1 参加者は、性別を問わないが、原則として全期間参加するものとする。
- 2 会場となる国立中央青年の家は、青年または成人団体を対象とし、研修者が共同生活をしながら研究討議やレクリエーションを行なう研修施設である。したがって、この施設の定める次のような生活規則によって団体生活をするようになる。

(1) 生活時間

起 床	6 : 00
朝のつどい	6 : 30 ~ 6 : 40
朝 食	7 : 00 ~ 8 : 00
研 修	8 : 00 ~ 12 : 00
昼 食	12 : 00 ~ 13 : 00
自由時間 (研究・運動)	13 : 00 ~ 15 : 00
研 修	15 : 00 ~ 17 : 00
夕べのつどい	17 : 00 ~ 17 : 10
夕食・入浴	17 : 30 ~ 19 : 30
研 修	19 : 30 ~ 21 : 00
消 燈	22 : 00

- (2) 起床、食事、入浴、消燈等の決められた時間は、よく守る。



- (3) 清潔・整とんに各自気をつけ、自主的に掃除を行なう。
- (4) 室内・室外を問わず、灰さらのある場所以外では喫煙しない。
- (5) 期間中は禁酒。
- (6) 食堂はセルフサービス（食事は原則として3食とも米飯である。）

(7) その他

ア) 宿舎は、ベッド式である。

イ) 携行品……ねまき、上ばき、運動ぐつ、その他日用品。  
軽い運動ができる服装も。

3 受講料・宿泊費は無料であるが、食事代（1日3食250円）

シーツ等の洗たく代等の実費を会場の受付で納入する。

4 会場までの交通費は、往復とも自分。

5 申込書は、別紙のような様式であれば、どんな用紙でもよい。

おもてに住所氏名を書き、10円切手をはった封筒を添える。

郵送の場合は、6月10日までに到着するよう、期限厳守すること。



## 漢字概説

39. 4. 28

### 1 日本の文字

日本の文字には、漢字、ひらがな、かたかな、およびローマ字の4種類があります。現在、日本語は主として漢字とひらがなによって書かれ、かたかなは 外来語・外国語・擬音語など、ローマ字は 外国人のための駅名の表示その他の場合に用いられます。ローマ字は、16～17世紀ごろ西洋からはいりましたが、漢字はもっと古く中国からはいつてきました。そして、日本で、漢字の一部分を省略してできたかたかなと、漢字をくずしてできたひらがなという一種の表音文字が考案され、漢字とともに合わせ用いられるようになったのです。

### 2 漢字の起源

漢字といわれるものの中には、峠(とうげ……山を上りつめ、これから下りになろうとする所)のように、日本でつくられたもの(国字と呼ばれる。)もごく少数ありますが、大部分は中国でつくられて、日本へ輸入されたものです。

紀元前14世紀から前11世紀にかけてのものといわれている中国河南省の殷墟(いんこ)という遺跡から、亀の甲や獣骨に文字を刻んだものが出ています。その文字は、今の漢字とは形が違っていますが、やはり漢字のほとんどの形であることがわかります。漢字は、時代によって形のとり方や書き方が変わってきました。今日ふつうに書かれる楷(かい)書体という書き方は、だいたい紀元前後ごろにできたものといわれます。印刷の活字にも書体がいろいろありますが、みな楷書体の書き方から出ています。



### 各種の活字書体

明(みん) 朝	ふつうに使用される
教科書体	教科書に使用される
清(せい) 朝	招待状や名刺など
宋(そう) 朝	名刺に使用される
ゴシック	見出しなどに使用
アンチック	エホンナドニモチイル
筆写体	ペンや筆で書く
行書体	た右上下
草書体	さおと下

### 3 漢字の成り立ち

約五万に近い漢字は、大きく分類すると、象形、指事、会意、形声の四つの方法によってつくられています。

象形(しょうけい)……形のあるものの名を、そのものの形に従って書き表わしたもの。

☉ 日    月    山  
木 木    馬 馬    川

指事(しじ)……形のないものを示すことばを何かのしるしで表わしたもの。

一 一    二 二    上    下

この象形と指事とは、漢字のつくり方の最も根本的なものですが、

これだけでは、すべてのことばを表わす文字をつくることができないので、二つ以上の文字を組み合わせて、ある一つのことばを表わす、会意とか形声とかいわれる種類のものがつくられるようになりました。

会意(かいい)……象形や指事によってできている文字を、二種以上組み合わせて、別の意味のことばを表わすもの。

林 (木がなりぶ)  
森 (木が多く集まる)  
鳴 (鳥がなく)

形声(けいせい)……そのことばの意味に関係する形と、そのことばの音に関係する形とを組み合わせてつくるもの。

江(こう) 紅(こう) …… 左が意味、右が音  
花(か) 草(そう) …… 上が意味、下が音  
間(かん) 聞(もん) …… 内が意味、外が音

このことから、漢字は類推によってだいたいその音と意味とを知ることができる文字であることがわかります。

### 4 漢字の分類配列

漢字の字書では、漢字を字の音に従って分類し、あるいは字の形から分類して配列しています。康熙字典という、中国で1716年に編集された字書は、「一、二、人、刀、木、糸、艸(くさ)」など、214の字を部首として、すべての漢字をそのどれかのなかまに入れてあります。一つ一つのなかま、すなわち部の中では、それぞれの漢字が画数の順に並べられています。そして、214の部も、部首の字の画数によって順序づけられています。この本では、後に述べる当用漢字表(だいたい康熙字典の部首の順)の順に従って配列してあります。



部首を知り、画を数えることを知ることは、漢字を早く見つけ出すのに必要なことです。特にこの辞典では、漢字のどの部分からでもひけるように、索引にくふうがしてあります。

## 5 漢字の音と訓

日本で漢字が使われはじめたのは、ほぼ3~4世紀のころといわれていますが、それ以来日本人は、漢字を使いこなすのにいろいろ苦心をしました。たとえば、もとの日本語のアキということばを書き表わすのに、中国語で意味の同じシュウということばを表わす「秋」という字を使うことを考えつきました。このような使い方に慣れるにしたがい、「秋」という字を見た瞬間にアキということばを頭に浮かべることができ、アキということばを書こうとするとき、すぐに「秋」という字が頭に浮かんでくるようになりました。こうして、日本語と漢字とが直接に結びつくようになり、日本では一つの漢字について、中国語流の読み方と、日本語での読み方との、2種類の読み方ができました。前者を音(おん)、後者を訓(くん)とよんでいます。漢字2字以上を組み合わせてつくられている熟語では、音だけで読むのか、訓だけで読むのか、あるいはどちらか一方の字を音、または訓で読むのかということについては、一定のきまりがないので、そのつど辞典にあたって確かめなければなりません。また、その漢字の、中国語の意味と日本語の意味とが今日ではちがっているものがあることに注意を要します。

## 6 当用漢字について

漢字の数が多きことは、すでに述べましたが、実際は案外少ない数しか使われていません。

政府は1946年に「当用漢字表」を定めて、日常には1850の漢字だけを使うことにしました。また、「当用漢字別表」というものも決めました。これは当用漢字の中からさらに881字を抜き出したものです。

これによって、義務教育の9年間に、読むことも書くこともじゅうぶんできるようにしなければならない最少限度が示されました。ただ、一般社会では、特に1945年以前の日本語の文章の中には、1850字以外の字が用いられていますので、この辞典では若干を収録して、それらを読むための便宜を考えました。

日本人は漢字を読むのに、音で読んだり訓で読んだりしますが、「生」の字を、「ショウ、セイ、いきる、うまれる、き、なま」と幾とありはも読むように、その音や訓は、必ずしも1種類ずつではありません。それについて標準を定めたのが「当用漢字音訓表」です。また、漢字は字画が複雑です。なるべくはっきり読むことができ、たやすく書くことができるように、そして同じ字でありながら形がまちまちになるようなことのないようにと、形の上の標準を定めたのが、「当用漢字字体表」です。この辞典も、原則としてこれらに従っていますが、旧音訓や旧字体も対照できるようにしてあります。

次に、漢字とかなとを組み合わせてことばを書きしるすときにたいせつなのは送りがないです。漢字を音で読むのなら送りがなは問題になりませんが、訓で読むとき、その読み方がはっきりするように漢字のあとにかなを添えます。「光」という字は、ヒカリというときはそのままですが、ヒカル、ヒカッタというときに「光る」「光った」と書くならわしです。「後」をウシロと読むときは、ノチと読まれないうに「後ろ」と書きます。政府はこの送りがなについても「送りがなのつけ方」を定めました。



7 熟語の成り立ち

漢字2字以上からつくられることは、すなわち熟語は、およそ次のような方法によっています。

(1) 同一の字を重ねて用いるもの

代代 (だいだい)

年年 (ねんねん)

(2) 同一または似た意味の字を重ねて用いるもの

表現 (ひょうげん)

消滅 (しょうめつ)

談論 (だんろん)

(3) 反対する意味をもつ字を重ねるもの

上下 (じょうげ)

左右 (さゆう)

異同 (いどう) -----異に重みがある。

多少 (たしょう) -----少に重みがある。

(4) 同類の事物をあらわす字を重ねるもの

日月 (じつげつ)

山川 (さんせん・やまかわ)

土砂 (どしゃ)

(5) 名詞の上に修飾する字を加えるもの

深海 (しんかい)

白壁 (しろかべ)

強国 (きょうこく)

(6) 目的語・補語の上に動詞を加えるもの

成功 (せいこう)

読書 (どくしょ)

乗車 (じょうしゃ)

(7) 名詞の下に動詞がくるもの

自信 (じしん)

水流 (すいりゅう)

国交 (こくこう)

(8) 動詞を重ねるもの

行進 (こうしん)

停止 (ていし)

運転 (うんてん)

(9) 動詞・形容詞の上に、修飾する字を加えるもの

最古 (さいこ)

徐行 (じょこう)

深謝 (しんしゃ)

(10) 有・無・未・既・不・非・否などを上におくもの

有用 (ゆうよう)

無害 (むがい)

未定 (みてい)

既出 (きしゅつ)

不審 (ふしん)

非礼 (ひれい)

否認 (ひにん)



(11) 「否」の字が上の字の意味とは反対である意をあらわすもの

諾 否 (たくひ)

安 否 (あんひ)

適 否 (てきひ)

(12) 動詞・形容詞・副詞などの下に、然・乎・如・的などを加えるもの

依 然 (いぜん)

断 乎 (だんこ)

突 如 (とつじよ)

先天的 (せんてんてき)

(13) もとの熟語を簡略にしたもの

経 済 (経世済民)

労 組 (労働組合)

短 大 (短期大学)

なお、熟語になると、次の例(→の右の例)のように読む場合があります。これは、音訓表にのっていない読み方ですが、このように読むことはさしつかえないことになっています。

木き → 木立 こだち

目め → 目深 まぶか

金かね → 金物 かなもの

雨あめ → 雨戸 あまど・春雨 はるあめ

何なに → 何時 なんどき

十ジユウ → 十銭 ジッセン

合ゴウ → 合併 ガッパイ

皇オウ → 天皇 テンノウ

寸スン → 三寸 サンズン

発ハツ → 出発 シュツパツ

夫フ → 夫婦 フウフ



## 筆順の手びき

### 1 筆順の必要性

できあがった文字さえ正しければ、書く順序はどうでもよいというものではない。漢字の筆順もかなやローマ字と同じように長い間の経験の集積によって、できあがったものであるから、実はいちばん書きやすい方法だといえる。筆順によつて、できあがった字形もかっこうがよく、早く書くこともできる。そのうえ漢字をよめるのにも便利であり、漢字の画数を調べるのにもつごうがよい。ただ、かなやローマ字とちがって、字数が多し、そのきまりも複雑であるから、まず基本的なものについて、どのような点画を、どのような順序で重ねていくかを、正確に理解し、それに習熟していくことが必要である。

このような意味で、ここでは漢字の筆順の基本原則と、日本の義務教育で教える漢字881字について、その楷(かい)書体の筆順を掲げることにする。

### 2 筆順の原則

大原則1 上から下へ

① 上の点画から書いていく。



三 (一 = 三)

工 (一 丁 工)

b 上の部分から書いていく。

草 (サ 苜 草)

喜 (士 吉 吉 壺 喜)

大原則2 左から右へ

a 左の点画から書いていく。

川 (ノ 川 川)

学 (イ ヴ ツ 学)

魚 (イ 魚 魚 魚)

b 左の部分から書いていく。

行 (イ 行)

湖 (シ 沽 湖)

注1 にすい「ン」、さんすい「シ」の最終画は、左下から右上に方向をとっているが、これは点の変わった形であって、「上から下へ」の原則に反するものではない。

注2 つちへん「土」、マへん「才」、うしへん「牛」などの最終画も左下から右上に方向をとっている。これも左の部分に現われる変わった形であって、こ

の部分に単独に現われる場合は「土」の最終画のように左から右へ水平の方向をとっている。したがって、これも「上から下へ」の原則に反するものではない。

注3 bの例外は次の3種のにょうだけである。

近 (斤 近)

建 (聿 建)

直 (育 直)

以上の2原則が漢字の筆順のうえではほんたいにせつな点である。次の8原則はさらに細部にわたるきまりである。

原則1 横画がさき

『横画と縦画とが交差するときは、ほとんどの場合、横画をさきに書く。』

a 横・縦の順

十 (一 十)

土 (一 十 土)

七 (一 七)

b 横・縦・縦の順

共 (一 十 廿 共)

花 (一 十 廿 花)



算 (算 算 算)

無 (无 无 无 无)

c 横・横・縦の順

用 (用 用 用)

末 (一 = 干 末)

耕 (一 = 三 耒 耕)

夫 (一 = 夫 夫)

d 横・横・縦・縦の順

耕 (耒 耒 耒 耕)

注4 横画があとになる例は、次の原則の場合である。

原則2 横画のつと

『横画と縦画とが交差するとき、次のa, b, c, dの場合に限って、横画をあとに書く。』

a 田

田 (口 田 田 田)

b 田の発展したもの

由 (口 巾 巾 由)

曲 (巾 曲 曲 曲)

角 (角 角 角 角)

再 (冂 冂 冂 再)

c 王

王 (一 一 干 王)

d 王の発展したもの

進 (一 巾 巾 巾 進)

馬 (一 巾 巾 巾 馬 馬)

生 (一 巾 牛 生)

寒 (冂 巾 巾 巾 寒 寒)

注5 次の例に見るように横画がさきの場合は、縦画が下に突きぬけているが、横画があとの場合は縦画が下に突きぬけていない。

例1 干 (一 二 干)

工 (一 一 工)

例2 甲 (口 巾 日 甲)

田 (口 巾 田 田)

例3 申 (口 巾 日 申)

由 (口 巾 巾 由)

原則3 中がさき

『中と左右があって、左右が1〜2画である場合は、中をさきに書く』



小 (丨 小 小)  
 当 (丨 丩 丩 当)  
 水 (丨 水 水 水)  
 緑 (纀 纀 纀 纀 纀)  
 衆 (衆 衆 衆 衆 衆)  
 業 (丨 丩 丩 丩 業)  
 赤 (赤 赤 赤 赤)  
 楽 (白 白 白 白 楽)  
 承 (ア 了 了 了 了 承 承)

注6 原則3には、二つの例外がある。

性 (ノ 性 性)  
 火 (ノ 火 火)

原則4 外側がさき

『くにかま之のように囲む形をとるものはさきに書く。』

国 (丨 冂 国 国)  
 同 (丨 冂 同)  
 内 (丨 冂 内)  
 司 (冂 司)  
 日 (丨 冂 日 日)  
 月 (丨 冂 月)

目 (丨 冂 月 目)

田 (丨 冂 田 田)

注7 加ま之 [・L] などの場合は下のよう<sup>に</sup>書く。

医 (一 又 区) 医

臣 (丨 冂 冂 臣 臣)

山 (丨 止 山)

菌 (艹 世 菜 菌 菌)

原則5 左払いがさき

『左払いと右払いとが交差したり、接したりする場合は、

左払いをさきに書く。』

文 (ナ 文 文)

人 (ノ 人)

金 (ノ 金 金)

原則6 つらぬく縦画は最後。

a 字の全体をつらぬく縦画

中 (口 中)

申 (日 申)

事 (亓 事 事)

b 縦画が下に突きぬけていなくても

書 (尹 書 書)



妻 (一 彡 妻 妻)

㊦ 縦画が上に突きぬけていなくても

平 (一 冂 立 平)

手 (ノ ㄥ ㄥ 手)

注8 上にも、下にも突きぬけない縦画は、上部・縦画・下部の順で書く。

里 (日 甲 里)

重 (ノ ㄥ 台 車 重)

謹 (讠 讠 讠 謹)

原則7 つらぬく横画は最後。

『字の全体をつらぬく横画は、最後に書く。』

世 (し ㄥ 世)

子 (ア 了 子)

母 (し ㄥ 母)

船 (フ 舟 舟 船)

注9 世だけは例外である。

世 (一 十 卅 卅 世)

原則8 横画と左払い

a 横画が長く、左払いが短い字では、左払いをさきを書く。

右 (ノ ナ 右)

有 (ノ ナ 有)

布 (ノ ナ 布)

b 横画が短く、左払いが長い字では、横画をさきに書く。

左 (一 ナ 左)

友 (一 ナ 友 友)

在 (一 ナ 在 在)

3 特に注意すべき筆順

(1) 左払いの書きかた

a あとに書く左払い

石 (一 厂 石)

反 (一 厂 反)

広 (一 厂 広)

b さきに書く左払い

皮 (ノ 厂 皮)

成 (ノ 厂 成 成 成)

減 (ノ ㄥ 減 減)

(2) 左払いの書きかた

a さきに書く左払い



九 ( ) 九 )  
級 ( 糸 級 級 )

b あとに書く左払い  
力 ( 丁 力 )  
刀 ( 丁 刀 )  
万 ( 一 万 万 )

(3) によりの書きかた

a さきに書くによ  
又 ( 又 処 )  
走 ( 走 起 )  
免 ( 免 勉 )  
是 ( 是 題 )

b あとに書くによ  
立 ( 立 近 )  
又 ( 聿 建 )  
直 ( 直 直 )

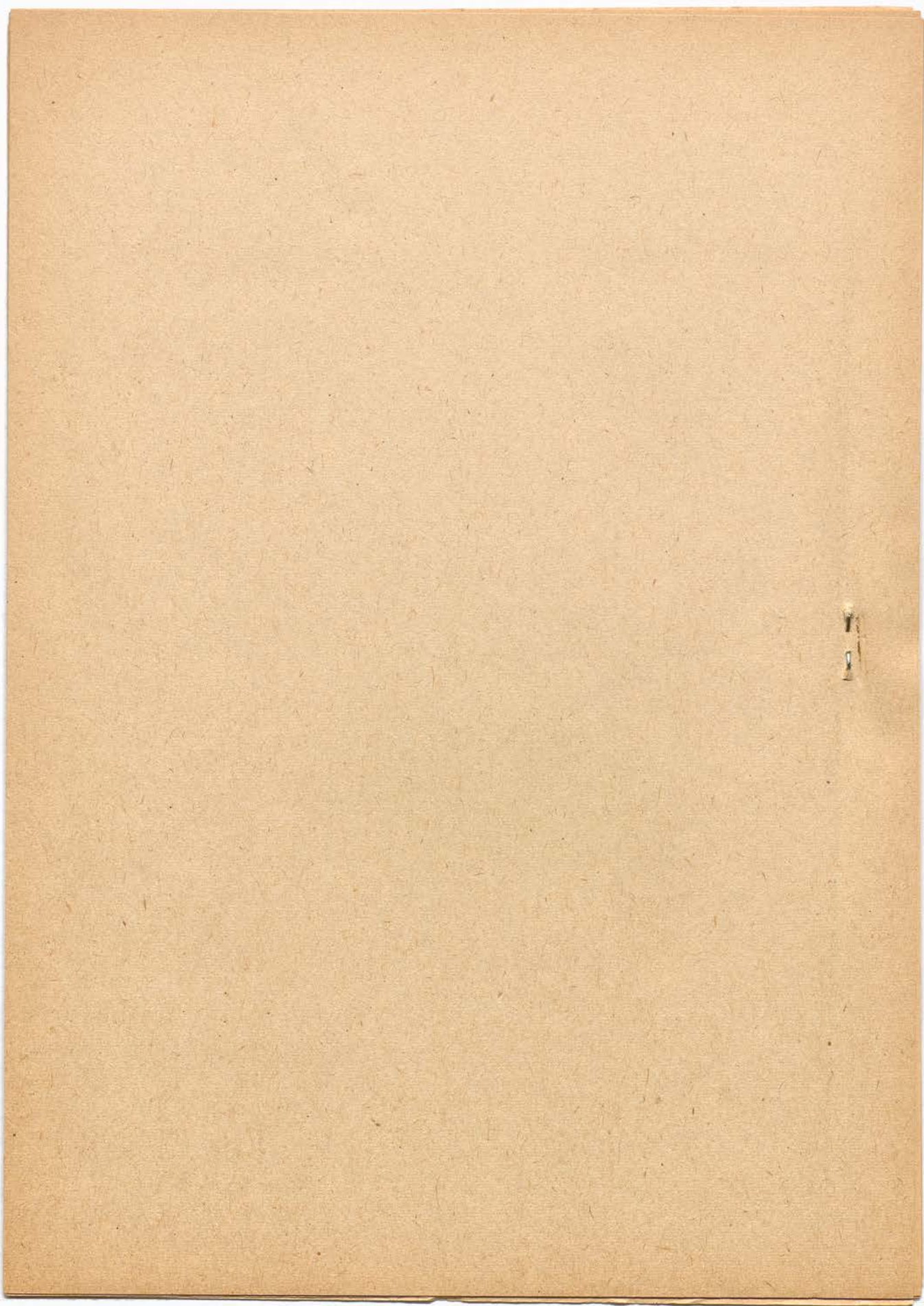
(4) はつがしらとまつりがしらの書きかた

a はつがしら「𠂔」  
𠂔 ( 夕 夕 𠂔 𠂔 𠂔 )  
b まつりがしら「𠂔」  
祭 ( 夕 夕 𠂔 祭 )

(5) 11311375字の書きかた

耳 ( 一 丁 耳 耳 耳 )  
門 ( 一 門 門 門 門 門 )  
長 ( 一 長 長 長 長 )  
馬 ( 一 馬 馬 馬 馬 )  
感 ( 一 感 感 感 感 )  
興 ( 一 興 興 興 興 )  
必 ( 一 必 必 必 必 )  
飛 ( 一 飛 飛 飛 飛 )  
乘 ( 一 乘 乘 乘 乘 )  
何 ( 一 何 何 何 何 )  
引 ( 一 引 引 引 引 )  
歌 ( 一 歌 歌 歌 歌 )  
限 ( 一 限 限 限 限 )







## この辞典の内容

- 1 この辞典は、外国人、主として外国人留学生が日本語を学習するときに、特に漢字の学習のために役立つことを念願して編纂したものである。この辞典の使い方に慣れ、日本語の学習がある程度進んだときには、さらに日本で編集し発行されている他の漢字辞典(漢和辞典)へと進んでほしい。それらの漢字辞典は、それぞれ漢字の検索法をくふうしているので、辞典の使い方に慣れて、早く漢字がひけるようになってほしい。
- 2 この辞典に収めた漢字の親字は、      字で、その内訳は次のとおりである。
  - (1) 当用漢字表の漢字 1850字

国民の生活能率をあげ、文化水準を高めることを目的として、1946年に日本の政府が決めたもの。このうち、特に義務教育の期間(小学校6年と中学校3年の9年間)に学習する881字を、いわゆる教育漢字というが、本書では区別しなかった。(付録の「筆順一覧表」参照。— 教育漢字の筆順が示してある。)
  - (2) 当用漢字表外の漢字       字

これから生まれる子の名に用いてよいと認められている92字、および地名など社会の各方面で用いられ、それらを読むために必要であると思われるもの。(国語審議会(文部大臣の諮問機関)が1954年に検討した当用漢字表の補正案で、加える字とされた28字を含む。)
- 3 親字の字体は、当用漢字については、当用漢字字体表(1949年政府決定)によるとともに、これと著しく異なっている旧字体にかぎって、旧字体を( )に入れて示してある。



- 4 見出し語についても、その選び方・並べ方に、いろいろと注意をはらった。
- 5 親字および見出し語の解説には、つとめてわかりやすい日本語を用い、随所に英語を入れて、理解の助けとした。
- 6 付録には、次の項目のものをのせ、この辞典をい-そう役だつものとした。

筆順一覧表

総画索引

音訓索引

部首索引 (字形索引)

漢字概説

筆順の手引き

都道府県名

人口10万以上の都市名

鉄道本線名

旧国名

## この辞典の使い方

### 1 親字について

(1) 当用漢字は、明朝体の活字を用い、〔 〕でかこんである。

(例) 〔北〕

(2) 当用漢字についての、おもな旧字体、または俗字体は、( )

でかこんである。

(例) 〔昼〕 (晝)

〔機〕 (杵)

(3) 当用漢字表外の字は、【 】でかこんである。

(例) 【稀】

(4) 部首と、そこに属する字については、伝統的な配列のしかたによる。たとえば、「相」は部首「目」に属しているが、「木」のところにも次のように示してある。

(例) 〔相〕 → 「目」 ( ) ( )内は、ページ数

(5) 旧字体や俗字体は、その画数のところにかかげ、新字体とそのあり場所のページとを、次のように示してある。

(例) 〔區〕 → [区] ( )

### 2 親字の音と訓

(1) 親字の次に、音と訓とが示してある。音は(音)の次に、訓は(訓)の次に、ともにひらがなで示してある。当用漢字音訓表の音訓は、すべて掲げるとともに、自動詞と他動詞の対応や、形容詞と動詞の対応による音訓も示してある。

(2) 当用漢字音訓表以外の音訓は、( )に入れて示してある。

(例) 〔交〕 (音)こう (訓)まじる, まじわる, まじえる (かわる, かわす)



### 3 親字の意味

- (1) 親字そのものの意味と、それが造語成分となったときの意味とを、現代国語として用いられているものを中心として説明してある。
- (2) 意味が二つ以上あるときは、①、②、③… で分け、はじめに最もよく使われている意味を述べている。英語があったほうがわかりやすいときには、英語をつけてある。
- (3) 対応字は、 $\leftrightarrow$  の次に示してある。参照すべき字は、 $\rightarrow$  の次に示してある。

(例) 裏  $\leftrightarrow$  表      上  $\rightarrow$  中

- (4) 意味の次に、その字を使ったおもしろな語例 (または句例) をあげてある。
- (5) 造語成分や、接頭語・接尾語などの役割についての説明は、 $\triangleright$  の次に示してある。

### 4 見出し語について

- (1) 親字が独立して用いられることばと、親字を初めにもっている熟語や句とを見出し語としてある。
- (2) 見出し語に、「する」がついたり、「的」がついたりしているものは、行を改めないで扱ってある。

### 5 見出し語の並べ方

見出し語は、原則として、次の順に並べてある。

- (1) 親字が独立して用いられる音または訓の語
- (2) 第2字めが、ひらがなの語 (五十音順)
- (3) 第2字めが、漢字の語 (画数順)

### 6 見出し語の表記

- (1) 当用漢字表、同音訓表内の字による見出し語は、[ ] でかこんである。
- (2) 当用漢字表外、同音訓表外の字による見出し語は、【 】 でかこんである。
- (3) 【 】 でかこんだ見出し語で、言いかえや書きかえの例のあるものは、注の形で示してある。

### 7 見出し語の説明

- (1) よみがなは、見出し語の次にひらがなで示してある。
- (2) 品詞の名は、次のように記号で示してある。

名詞	$\rightarrow$ (名)	代名詞	$\rightarrow$ (代)
自動詞	$\rightarrow$ (自)	他動詞	$\rightarrow$ (他)
形容詞	$\rightarrow$ (形)	形容動詞	$\rightarrow$ (形動)
副詞	$\rightarrow$ (副)	連体詞	$\rightarrow$ (連体)
接統詞	$\rightarrow$ (接)	接頭語	$\rightarrow$ (頭)
接尾語	$\rightarrow$ (尾)		
連語	$\rightarrow$ (連語)	句	$\rightarrow$ (句)

ただし、名詞は、その見出し語が他の品詞にも用いられるときにかぎって、I(名)…… II(副)…… のように示してある。

- (3) 動詞のよみには、治用語尾の部分を示すため、語尾の前に・ (なかぐろ) を入れてある。

(例) 【浮かぶ】 うかぶ      【取り入れる】 とりいれる

- (4) 動詞と形容動詞の治用形は、次のように示し、治用の名称は省略した。



- 四段活用 (例) 「突 入」 → -ら, り, -って  
「飛 ぶ」 → -ば, び, んで
- 一段活用 (例) 「受ける」 → -け, ける  
「着 る」 → き, きる
- サ行変格活用 (例) 「熱する」 → -せ, し  
「信する」 → -ぜ(じ), じ  
「勉強する」 → -さ, し
- 形容動詞 (例) 「急 ぐ」 → -な, (の), に  
「静 か」 → -な, に  
「高 貴」 → -な, (の)

- (5) ことばの意味が二つ以上あるものは、①, ②, ③……で分け、はじめに現在最もよく使われていると思われる意味を述べてある。
- (6) 対応語には、↔ の符号を用い、それ以外には cf. を用いている。

(例) [4又入] しゅうにゅう ↔ 支出  
[劇化] げまか cf. 脚色

## 8 応用語

\* の次にある熟語は、親字が中・下にくる応用語である。

## 漢字や語句のもとめ方

### 1 親字のもとめ方 (「 」の字を例として)

(1) よみ方がわからないとき

(A) 部首索引を用いる。

この字の部首がわかっているときは、部首索引の中で\_\_画の「 」を\_\_ページのもとめ、「 」の画数( )によって\_\_ページを見つける。部首がはっきりわからなくても、つくりなどの漢字の一部からみけるようになっている。

(B) 総画索引を用いる。

この字の部首がわからないときは、「 」の字の総画数が\_\_画であることによって総画索引の\_\_画のところをしらべると、\_\_ページにあることがわかる。

(2) よみ方がわかっているとき

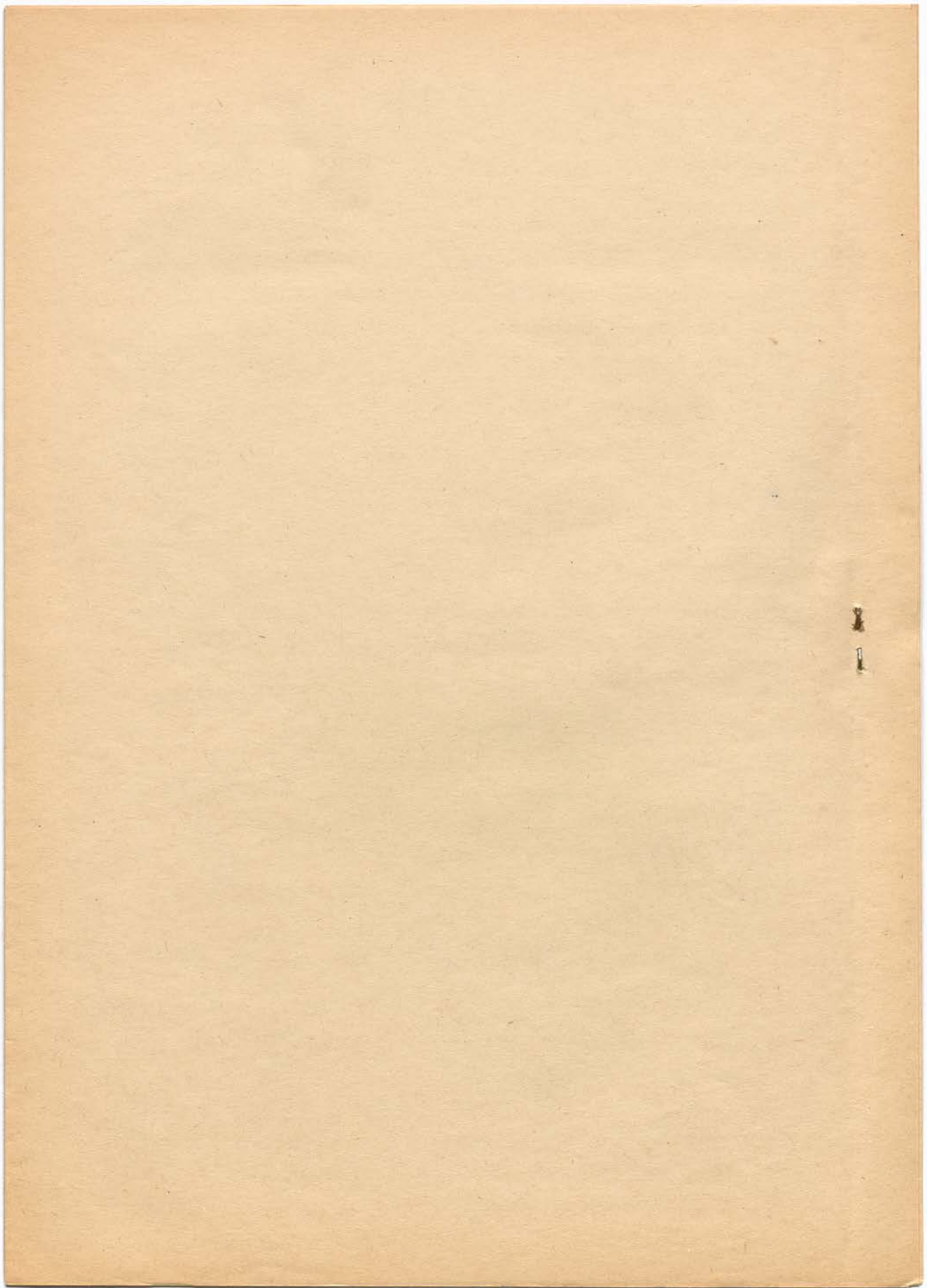
(A) 音訓索引を用いる。

「 」の字の音「 」なり、訓「 」・「 」なりを、音訓索引でもとめると、それが\_\_ページにあることがわかる。音訓索引は、五十音順(あいうえおの順)に並べてある。

### 2 語句のもとめ方

そのことばの第1字の漢字を、索引によってもとめ、見出し語の並べ方の順によって、その語句を見つける。







## 親字の音訓について

39.9.21

### 1 当用漢字表の字

- (1) 原則として当用漢字音訓表による。
- (2) 自動詞と他動詞の対応のあるものを入れる。

(音訓表) (自動詞)  
○ 上 あげる → あがる

- (3) 形容詞・動詞・形容動詞の対応のあるものを入れる。

(音訓表) (動詞)  
○ 悲 かなしい → かなしむ  
○ 確 たしか → たしかめる

- (4) 音訓表外の音訓で、必要と認められるものは、( )に入れる。

増 (音訓)  
訓ます (ふやす、ふえる)

- (5) 連声・熟字訓などは入れない。

× 雨 → あま  
× 五 → さ  
× 羽 → わ、は、は

- (6) 動詞の名詞形は入れない。

× 進 →すすみ

- (7) 人名・地名の特殊な読みは入れない。

× 信 → のぶ

- (8) 古典的な読みは入れない。

× 交 → こもこ

### 2 当用漢字表外の字

- (1) 台本である「新解漢字辞典」の中から適宜取捨する。
- (2) 古典的な読みは入れない。 × 乃 → すなわち
- (3) 地名だけにしか用いられないような字の読みは、入れない。
- (4) 人名の特殊な読みは入れない。



2/11.スミ

昭和40年2月4日

浅野鶴子殿

文部省調査局留学生課長

臼井 亨一

文部省調査局国語課長

内山 正

日本語教育について

1月29日開催の日本語教育研究会については、ご多用中にもかかわらずご出席くださりまして、ありがとうございます。

この会議において話題になりました下記の点について、別紙回答様式によってなるべく早くご回答くださるようお願いいたします。特に2については、お心あたりの人（一応の候補者と考えられる人であれば、確定的でなくてもけっこうです）を至急お知らせくださるようお願いいたします。

記

1 日本語教育研究会が日本語教育の基礎的調査研究を進めるにあたって、購入整備することが必要であると考えられる出版物

著者名、書名、発行所、価格（わかれば）

(編)

(和書・洋書を問いません。)

2 ハワイ大学で計画中の日本語教育のDrill Masterを希望する者

氏名、最終学歴（専攻）、<sup>年次</sup>所属、年齢、

日本語教授経験の有無

同封の別紙1、別紙2にご記入のうえ、

東京都（中央局区内）千代田区霞が関3-4

文部省調査局国語課長 宛てに

ご送付ください。

このような様式であれば、ほかの用紙でもけっこうです。



## 外国人留学生のための基本語用例辞典の編集要項

(昭和40年度)

### 1 目的・対象

- (1) 外国人留学生が日本語を学習するために必要な辞典を作成する計画の一つとして、基本語用例辞典を編集する。
- (2) 日本語の中で、特に基本的であると思われる語を中心として解説し、豊富な用例を付して、その語の理解ならびに使用に便利なようにくふうする。
- (3) 対象は主として外国人留学生とし、初歩の日本語学習の効果を高めることを目的とする。

### 2 編集方法

日本語教育の専門家若干名を依頼し、その協力を得て、次の事項を行なう。

- (1) 編集方針・内容の決定
- (2) 執筆要領の作成
- (3) 採録語の選定
- (4) 執筆者の決定

(5) 校閲者・翻訳者の決定

(6) その他

### 3 原稿執筆および翻訳校閲

執筆者若干名を依頼し、執筆要領に従って原稿を作成する。

翻訳者・校閲者若干名を依頼し、執筆原稿について翻訳校閲する。

### 4 年度計画

昭和40年度(第1年度)は、編集方針等の決定、執筆要領等の作成、採録語の選定および一部用例の採集とし、昭和41年度(第2年度)は、用例の採集を続行しつつ執筆翻訳を行ない、昭和42年度(第3年度)は校閲印刷とする。

印刷・刊行は、昭和43年3月の予定。



年次計画

第1年次(昭和40年度) 準備・語句の選定・用例採集・解説執筆  
 第2年次(41) " " " 校閲  
 第3年次(42) 校閲・翻訳 印刷刊行

従事する人(本者以外)

編集委員  
 (校閲) 専任委員  
 執筆(解説)  
 (用例採集者)  
 Arbeiter  
 翻訳者

用語の選定  
 執筆要領  
 用語表  
 用例の分類(採集)  
 解説  
 校閲  
 訳一校閲

仕事のだんどり

- 委員等の人選・構成
- 規模の概略 (予算、できあがりの大きさ)
- 専門家、経験者 に意見をさぐ集まり
- 辞典の性格を規定する、編集方針の確立、採集方法・執筆要領を定める
- 用例採集 --- あらかじめ 採録語句を限定するものとしてとりあげる 語彙の選定はどうか  
 用例採集の範囲・資料  
 辞典 --- 国語・和英・和独・和仏 など - Arbeiter  
 教科書 --- 日本語・国語  
 一般 ---  
 文法書 ---  
 国研の資料は 利用できるが - Arbeiter



第4回 <sup>外国人の</sup>日本語教育学会総会実行計画

○ 日時 昭和40年6月26日(土)

○ 場所 厚生年金会館6階会議室

新宿区番町(35)1111

○ 総会責任者 鈴木忍 (ISI)

○ 会計責任者 伊藤芳昭 (ISI)

○ 受付(1.00開始)

責任者 森田 (ISI) A [学会費] [ ] [ ]

B [ ] [ ] [ ]

C [新会員受付, 機関誌] [ ] [ ]

D [懇親会] [ ] [ ]

E [来賓席] [ ] [ ]

○ 評議員会 [ ] [ ]

進行 阪田(外大), 議長 浅野(東日語), 報告 倉持(千葉)

① 39年度会計報告

② 事業報告

○ 会員総会 [ ] [ ]

進行 小出(ICU), 議長 林(国研), 報告 高橋(外大)

① 39年度会計報告

② 事業報告

③ 新評議員選出

○ 新評議員会 [ ] [ ]

進行 阪田(外大), 議長 浅野(東日語), 議長 高橋(外大)

① 40年度予算

② 事業方針

③ 新理事選出

④ 会則変更

○ 新理事及び会長選出

○ 会員総会 [ ] [ ]

進行 小出(ICU), 議長 林(国研), 議長 倉持(千葉)

① 40年度予算

② 事業報告

③ 会長承認

④ 会則変更

○ 公開講演会 [ ] [ ]

司会 池田(千葉)

1 挨拶 金沢 謹 (ISI)

2 [ ] [ ]

3 ッンポジウム [ ] [ ]

司会 [ ] [ ]

提案者 [ ]<sub>1</sub>, [ ]<sub>2</sub>, [ ]<sub>3</sub> [ ]

○ 開会の辞

木村 (早稲田)

○ 懇親会 [ ] [ ]

受付 [ ] [ ]

進行 木村 (早稲田), [ ] [ ]

◇ 記録係 小杉(外大), 荒張(千葉)

◇ 録音係 水谷(早稲田), 藤田 (ISI)

◇ 会場設営 富田 (ISI), 林 (ISI)

◇ 当番校 国際学友会日本語学校



文調国第38号

昭和40年2月17日

浅野鶴子殿

文部省調査局長

天城 敷



日本語教育研究会について(通知)

下記によつて、第3回の研究会を開きますから、ご出席ください。

記

日時	昭和40年2月26日(金)
	午後2時～5時
場所	文部省 第2会議室(6階)
議題	1 基礎的調査研究について
	2 研修計画について
	3 その他